

著者である秋山正子さんと私との出会いは、かれこれ16年以上前まで遡る。京都府看護協会の訪問看護養成研修で、彼女は在宅ホスピスの講義を担当し、一方の私は訪問看護師を始めて3年目頃で、研修生として参加していた。その後、私は秋山さんをはじめ、すでに活躍していた宮崎和加子さん、山崎摩耶さんたちを目標に、京都での訪問看護に看護師人生をかけようと決意し、日々訪問看護を重ねていた。そうしているうちに、地域で利用者をただ待つのではなく、病院から在宅へ移行させる医療・看護をマネジメントすることの重要性に気がついた。

どちらのケアが、 よりクオリティオブライフを保てるか

在宅医療を知らない病院の医師や看護師が、「帰りたい」と願う患者に、独居であるとか、医療依存度が高いとか、家族が拒否しているという理由で、帰すことを諦めている。しかし、生活の場に戻れる医療・看護を提供しなければ、そうした高齢者や病気をもった人たちが増える一方であることも事実だ。誰のための医療なのかを患者・家族が主体的に考え参加できる医療のあり方をさらに追求するため、私は2002(平成14)年に病院に戻って以来退院調整看護師としてさまざまな課題に取り組んできた。秋山さんとはそうした思いを共有し、いまでは研修会や講演・執筆活動で協力し合う関係である。

本書には、患者本人や家族が在宅ケアを望んでも、なかなか思うようにならない現状のなかで、お姉さんの事例をはじめうまくいった事例を挙げ、その要因を“どちらのケアが、よりクオリティオブライフを保てるか”の見極めが早い段階でできたこと、そのために整えなければ

ならない実際的な条件を充足するよう、一つひとつ問題解決を図っていったことが大きいと書かれている。まさに「患者の生活を考える、そのためのマネジメントを行なう」退院支援・退院調整が大きなカギを握っているということだ。

看護の果てなき夢と希望を 与えてくれる

私はいま、全国で退院支援・在宅移行をテーマにした講演や退院調整看護師養成研修に走り回り、これまで京都大学病院で培ったシステムや考え方を伝道している。急性期ではとかく、医師からの指示待ち、そして指示通りにいかに動くかといった“診療の補助”が優先される。そんななかで、日々オンゴーイングで患者・家族と向き合い、対応に悩む病棟看護師や医師たちとチームカンファレンスを行ない、「患者にとってどうすることがよいのか」を考え行動してきたことを一人でも多くの人に知ってもらいたいからだ。

秋山さんが看護師としてどう考え、何をしてきたのか、そしてどのような言葉でそれを伝え、患者の語りを引き出してきたのか、さらに患者が病気をもって生きることに寄り添う看護をするという、本来あるべき看護の姿が本書を通じてみえてくる。そして、人が自分の人生を生きようとするときの力、家や地域といった環境がもつ力、長い歴史のなかで人が蓄積してきた魂の力など、いろいろな力が合わさって伝わり、共鳴し、家族や友人、そして私たち医療者、ケア提供者、患者に関わるすべての人に、“人間ってすごいなあ”と、力を与えてくれる。

がんになっても老いても最期まで暮らせるまちづくりをめざす私たちに、果てなき夢と希望を与えてくれる一冊である。



在宅ケアの不思議な力

秋山正子 著
定価 1470 円
(本体 1400 円 + 税 5 %)
医学書院
TEL. 03-3817-5657

人が生きようとする力を信じ、 それに寄り添う看護

宇都宮宏子 京都大学医学部附属病院地域ネットワーク医療部看護師長

評
BOOK